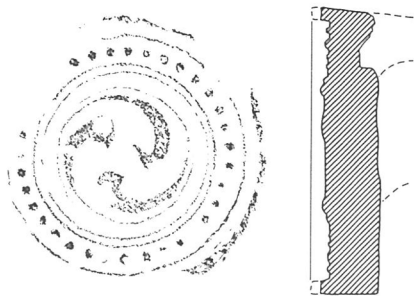


第38图 包含層出土遺物(1)

る。体部外面の調整は平行タタキの後にナデを施している。古墳時代後期に比定される。

214・215は瓦器碗である。216は瓦器皿である。

217～220・225は近世の陶磁器である。217は唐津焼系の皿である。底部はやや上げ底状を呈し、露胎に仕上げている。内面に胎土目が4箇所認められる。16世紀末から17世紀に比定される。218は波佐見焼系の染付碗である。18世紀のものと思われる。219は唐津焼系の



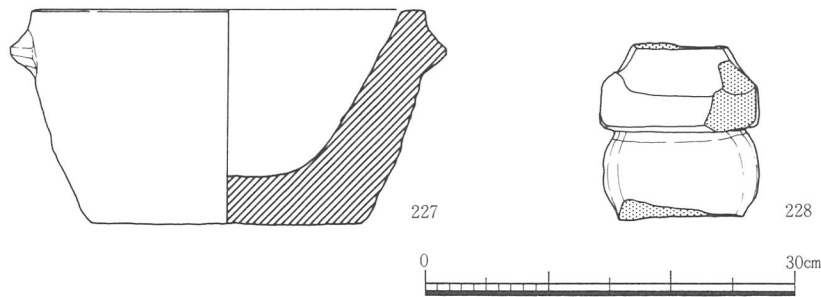
第39図 包含層出土遺物(2)

の三島手象嵌文大鉢である。内面に胎土目が観察される。17世紀に後半比定される。220は貝塚市堀町に所在したとされる音羽焼<sup>(1)</sup>の鉢底部とみられる。現状では内面にのみ釉が施されている。釉の発色はオリーブ色を呈する。胎土目が認められる。19世紀初頭のものと思われる。225は挿鉢である。いわゆる堺挿鉢である。

221～224は紡錘状の土錘である。大型のものは陶質、小型のものは土師質である。

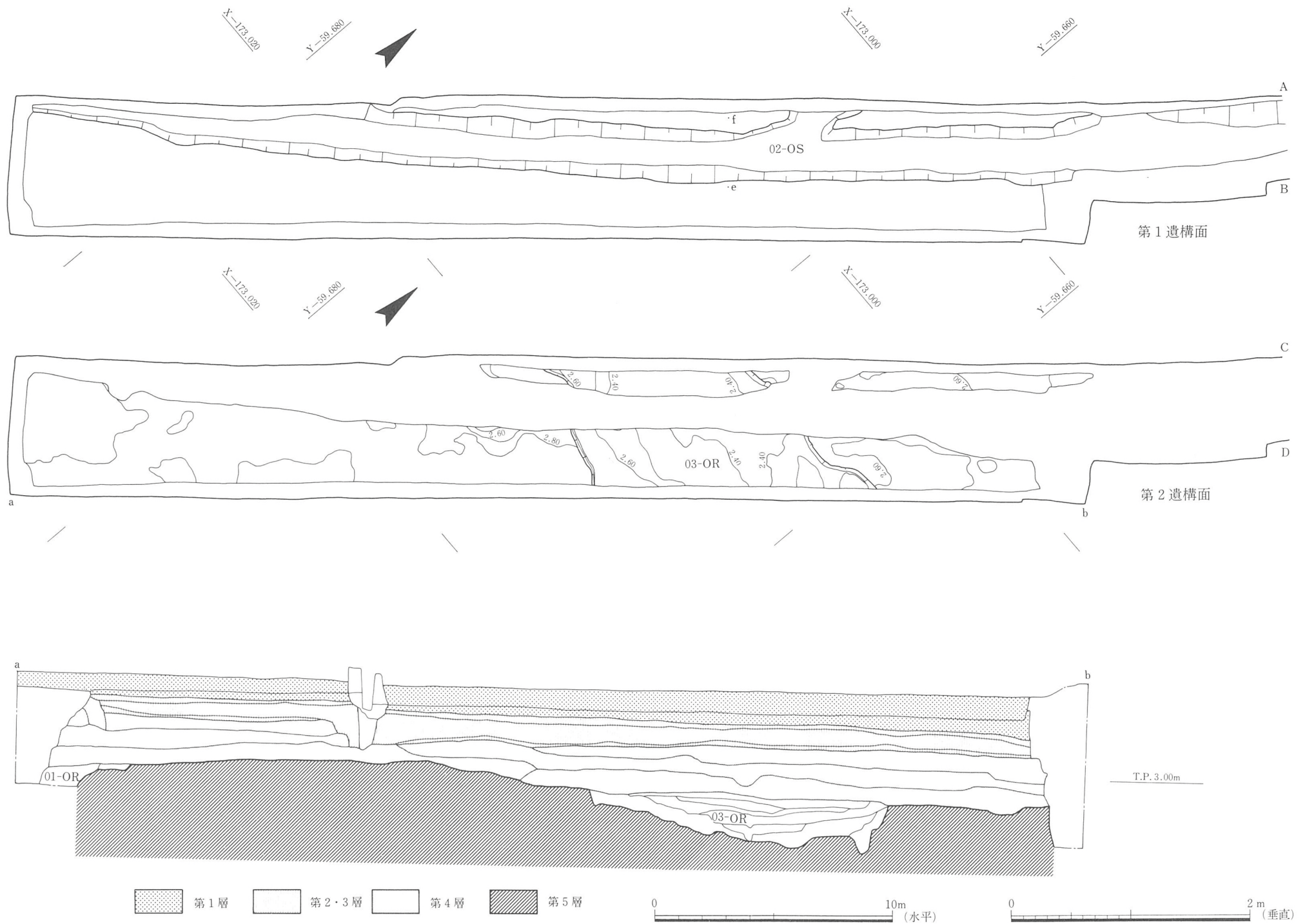
226は三巴文軒丸瓦である。瓦当部のみ遺存しており、表面の磨耗が著しく文様は不明瞭である。特に周縁端部を全て欠損しており、本来の高さは不明である。巴は右向きで、その尾は細長くおよそ半周する。内圏線は二重に巡り、珠文は35個を密に配する。内区をやや厚く仕上げている。径はおよそ15.4cm、周縁幅0.7cm、外区幅1.4cm、内区径9.0cm。平安時代末期まで遡る可能性をもつ。

227は石製の鉢である。復元径31.8cm、高さ17.0cmを測り、外面に幅約9cmの把手が2箇所を作り出されている。底部内面に磨滅痕が認められ、挿鉢として使用されていたことが窺われる。和泉砂岩製とみられる。228は一石五輪塔である。火輪と水輪の一部が遺存している。風化が著しく、陰刻は認められない。和泉砂岩製とみられる。



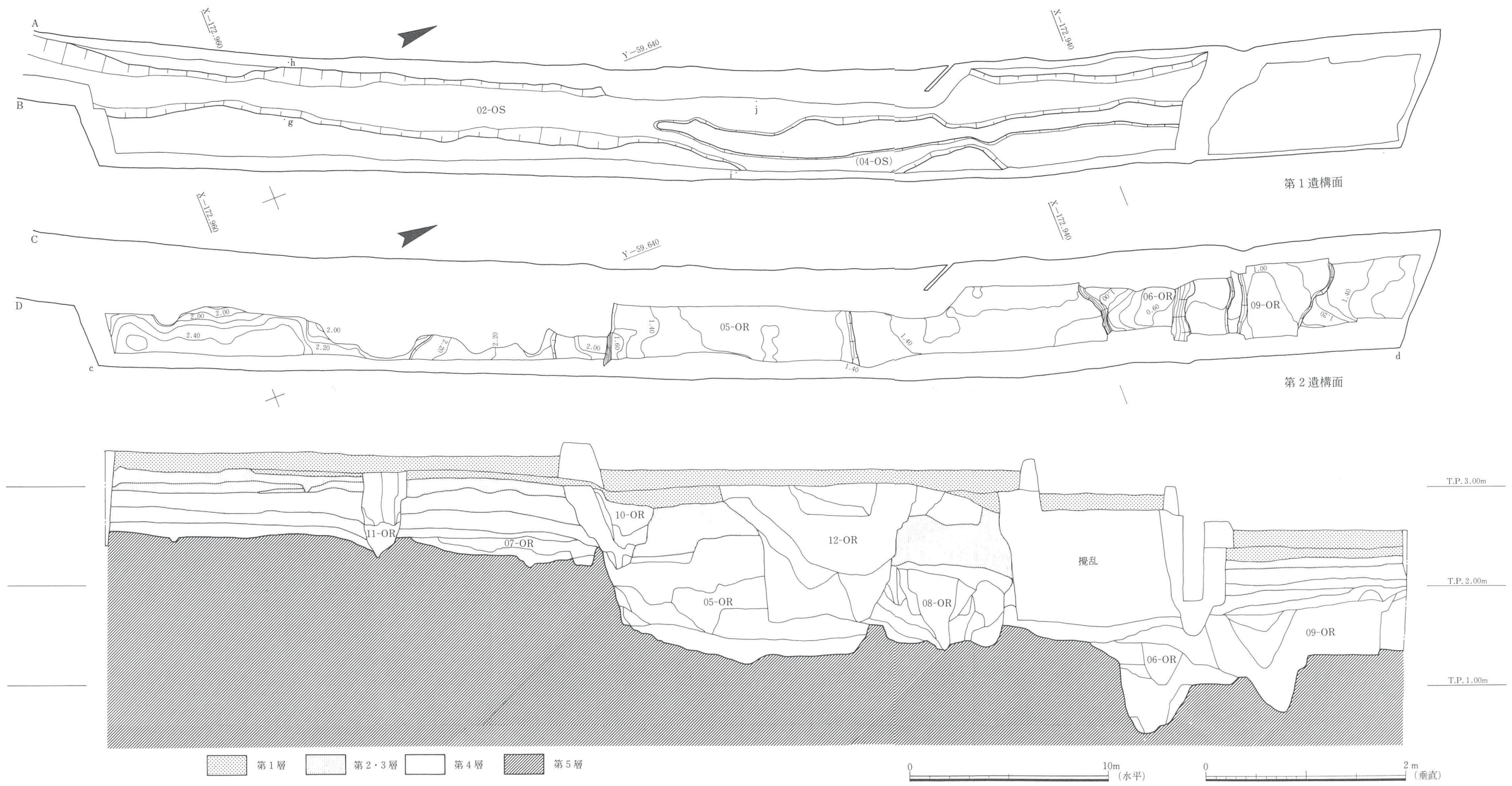
第40図 包含層出土遺物(3)





第41図 調査区平面図・断面図(1)





第42図 調査区平面図・断面図(2)

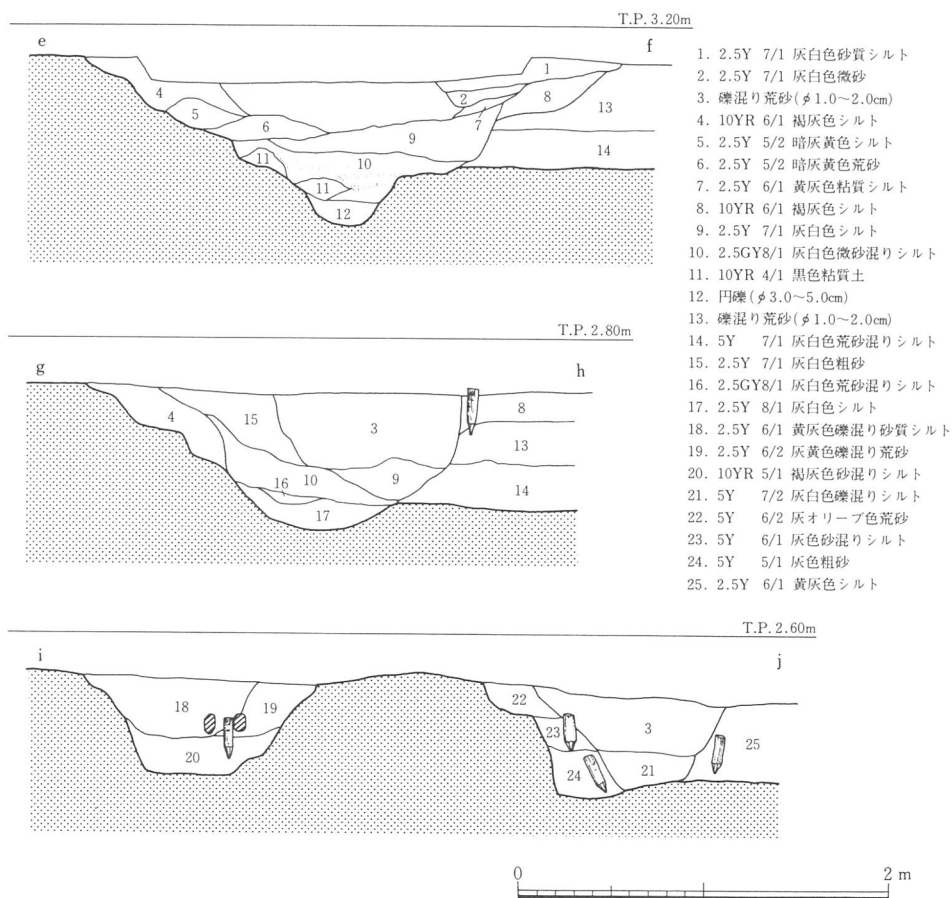
### 第3節 遺構各説

#### 第1項 第1遺構面

02-O S (第43~49図、図版25・26・30~35)

02-O Sは調査区をほぼ縦断するかたちで検出した溝である。幅1.3~3.0m、深さ0.6~0.9mを測る。A24P P付近で二本に分流する。現地調査の際には、南側を走行する溝を04-O Sとして遺物の取り上げを行ったが、埋土の状況や出土遺物から同時期に並存したと考えられることから、今回、同一の遺構として報告することにした。

02-O Sには掘方が認められた。北側は調査区外となるため検出できなかったが、その幅は2~4mに及ぶものとみられる。木杭や横木により整形、補強がなされていた。



第43図 02-O S断面図

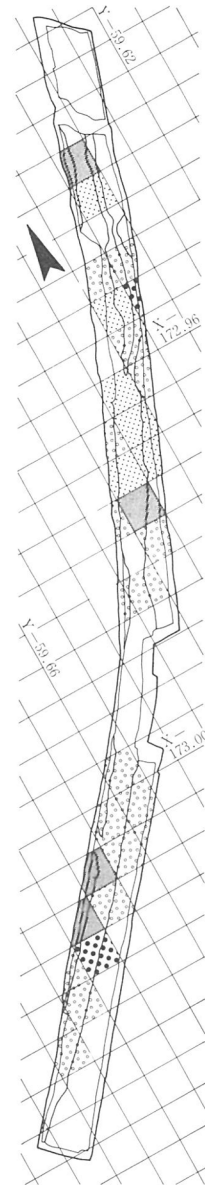
埋土は主に砂と礫とからなっている。長期にわたって利用されていたとみられ、江戸時代の遺物と近代の遺物が混在して検出された。幾度か「川ざらい」を繰り返しながら、利用されていたものであろう。

出土遺物はコンテナにして約10箱分を検出した。古墳時代から近世にかけてのもので、近代のものも含まれている。なかでも中心となるのは17～18世紀にかけてのものである。また瓦の量が顕著で総量の過半数を越えている。

229～254は陶磁器である。229は牡丹唐草文染付である。高台内面に銘が認められる。中国産のものともみられ、16世紀末から17世紀前半に比定される。230は唐津焼系の皿である。17世紀中頃のものともみられる。231は波佐見焼系の青磁染付碗である。体部外面を青磁に、体部・高台内面を染付に仕上げている。高台内面に略された銘が認められる。232～236は波佐見焼系の染付碗である。235・236は見込部の釉を蛇ノ目状に剥いている。237は波佐見焼系の染付杯である。238～240は波佐見焼系の染付皿である。238と239は口縁を輪花状に作り、内面中央に菊花文を描く。外面に「虫喰」が多く認められる。形状、色調、文様等の類似からセットになると考えられる。240は内面に双鳥文を描く。241は伊万里焼系の染付皿である。見込部に五弁花文を描く。242は唐津焼系の刷毛目鉢である。243は波佐見焼系の小壺である。244は波佐見焼系の青磁花瓶である。高台内面の釉を蛇ノ目状に剥いている。245は波佐見焼系の染付仏飯具である。以上のものは全て18世紀代のものと考えられる。

246～250は何れも伊賀・信楽焼系の陶器である。246はトチリ鍋の落とし蓋である。内面につまみを有する。247は碗である。248は鉢である。249・250は行平である。以上のものはいずれも19世紀代のものである。

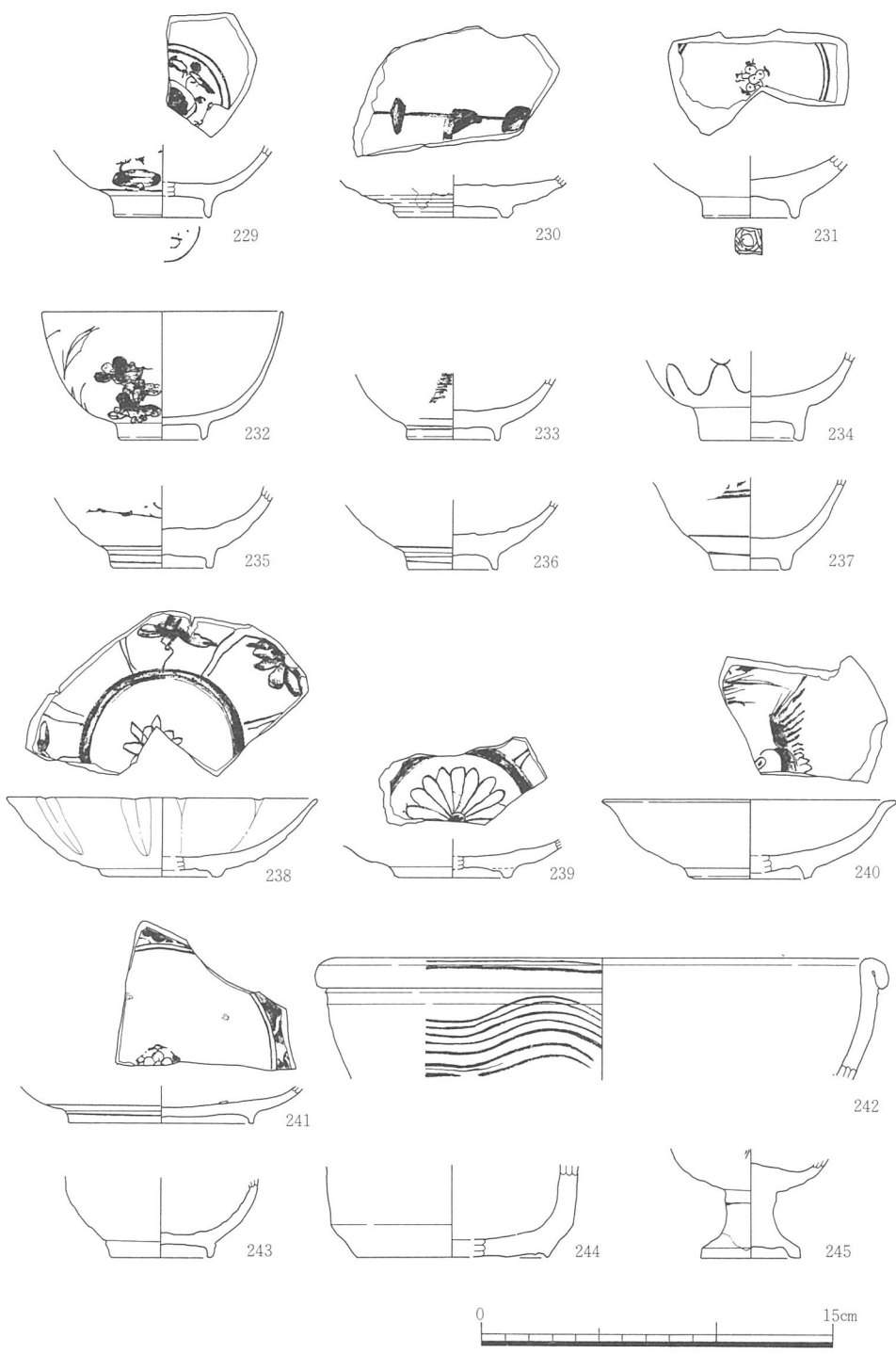
251～253は堺挿鉢である。254は伊賀・信楽焼系の挿鉢である。いずれも18世紀代の所産であろう。



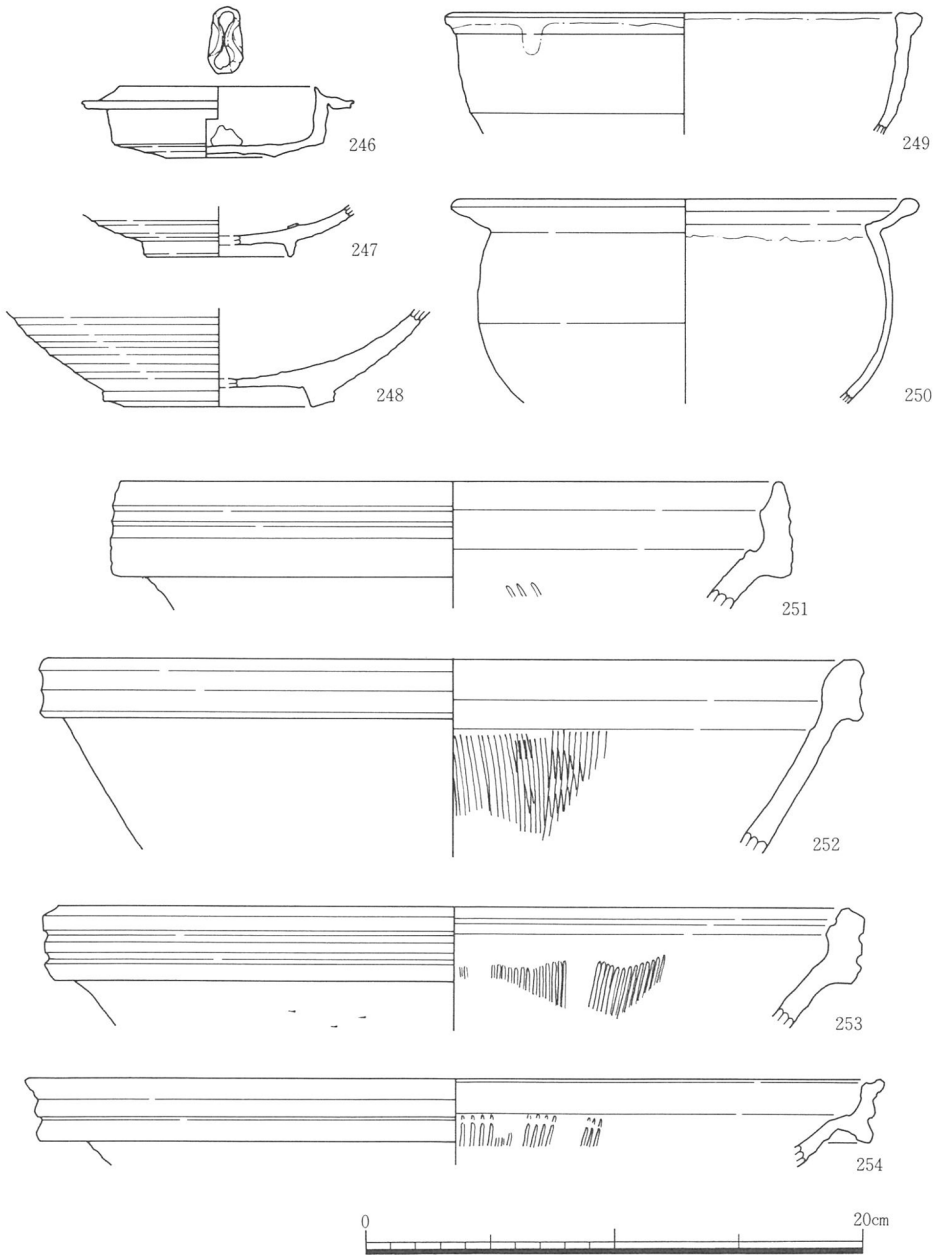
- 1～5個
- 6～10個
- 11～20個
- 21個以上

第44図 02-O S 瓦出土分布図





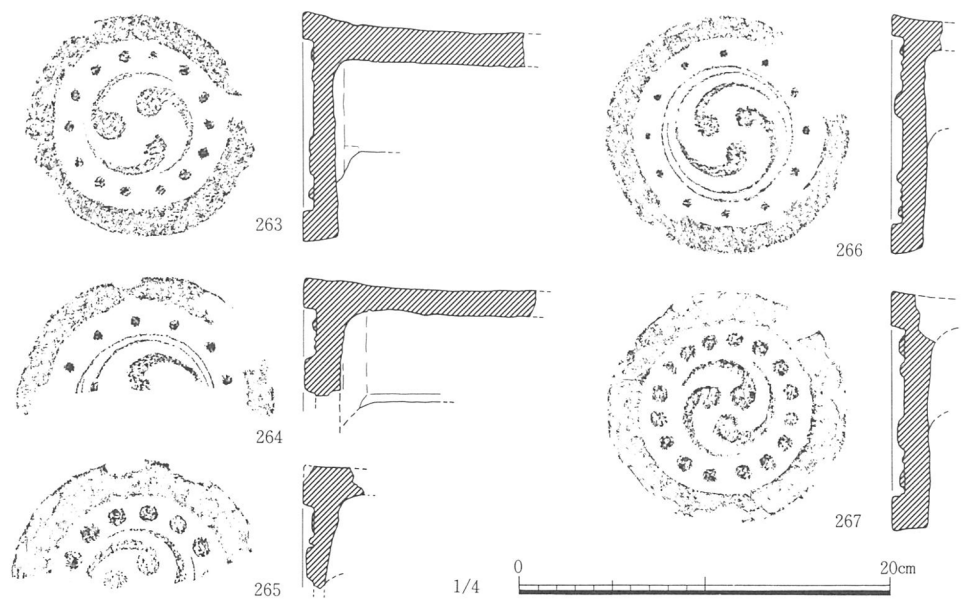
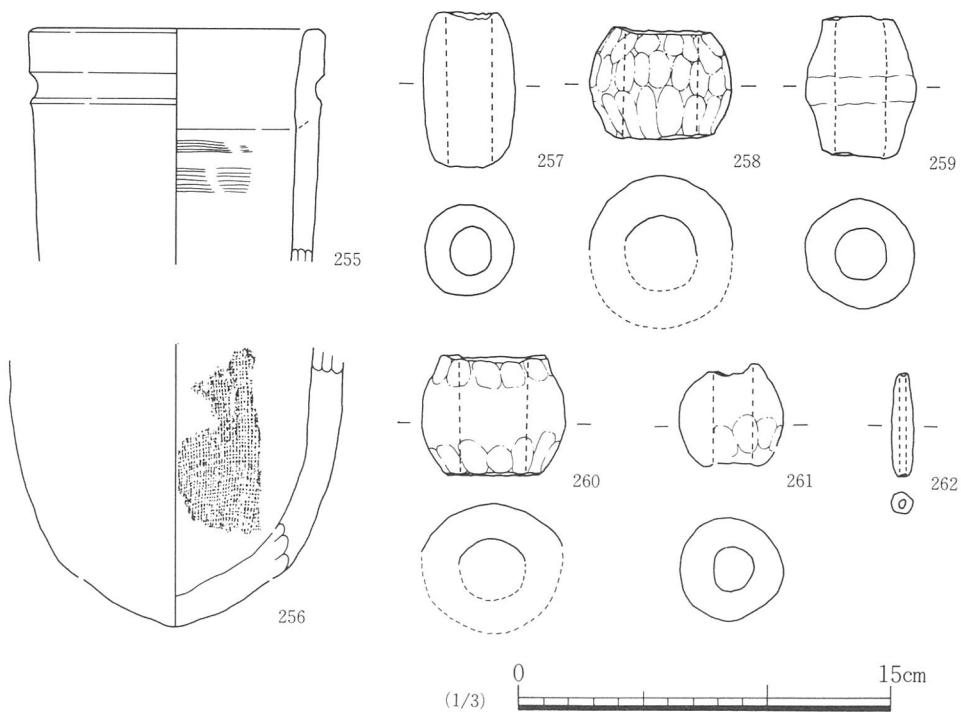
第45图 02-O S 出土遺物(1)



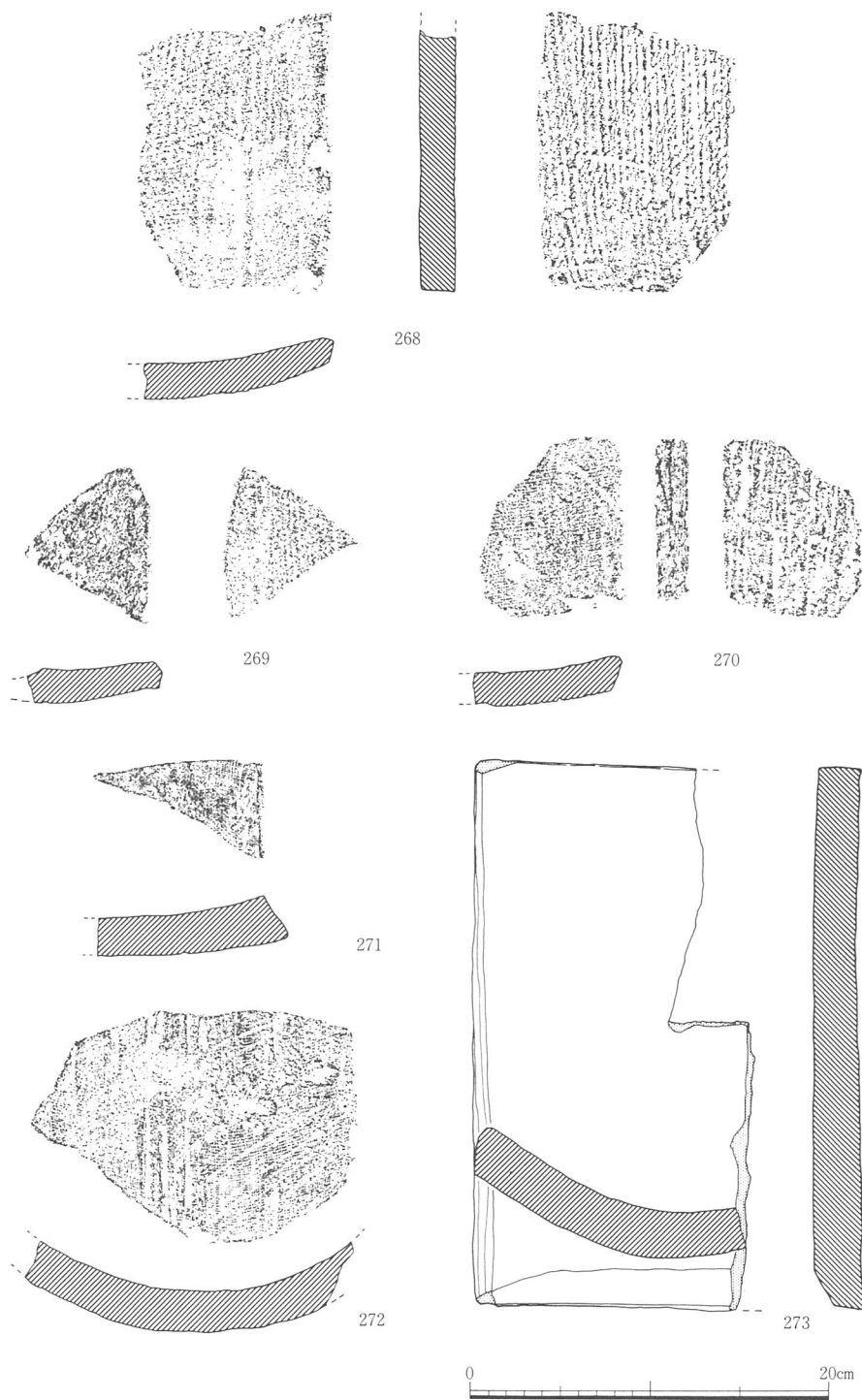
第46図 02-O S 出土遺物(2)

255・256は蛸壺形土器である。255は陶質で無釉である。口縁部に紐を巻くためのくびれを有する。256は土師質で体部内面に布目圧痕が観察される。

257～262は土鍾である。257～259は陶質、260・261は須恵質、262は土師質である。



第47図 02-O S出土遺物(3)



第48図 02-O S出土遺物(4)



263～267は三巴文軒丸瓦である。巴の向き、珠文の数・大きさ、内圏線の有無など様々なバリエーションがみられる。263は、径12.3cm、周縁幅1.4～1.8cm、内区径5.6cmを測る。珠文はやや小さく、14個が配置されている。巴は左向きで、尾は短い。266は径12.7cm、周縁幅1.3～1.6cm、内区径7.4cmを測る。珠文は小さく12個が配置されている。内圏線を有する。巴は左向きで、尾は長く半周する。いずれも近世の所産とみられるが、264、266はなかでもやや古い様相を呈している。

268～273は平瓦である。268は厚さ2.0cmを測る。凸面には縄目タタキの跡が認められ、両面ともに0.5mm以下のはなれ砂が多く付着している。側縁にはヘラケズリが施されている。270は厚さ1.9cmを測る。凸面には縄目タタキの跡とはなれ砂の付着が認められる。凹面には布目圧痕が認められる。側縁にはヘラケズリが施されている。273は全長30.3cm、厚さ2.7cmを測る。狭端縁に幅2.0cmの面取りが施されている。

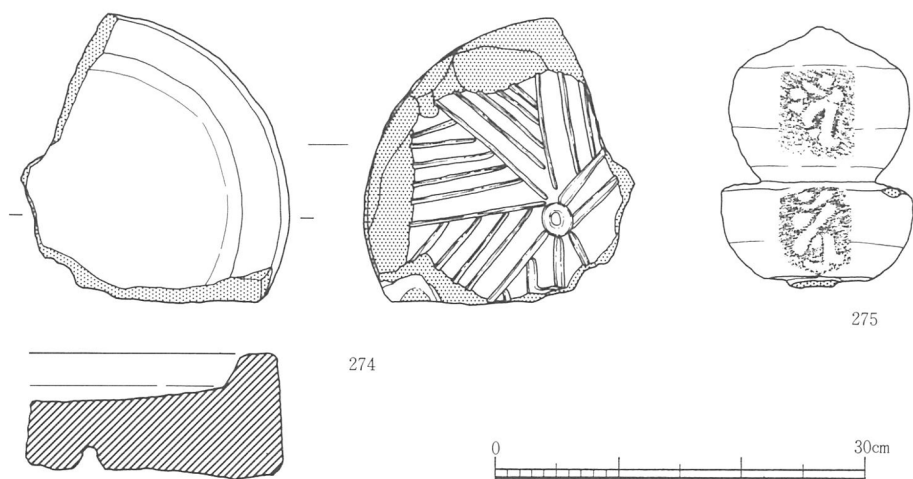
出土した瓦は主に埋土中層での出土で、当遺構利用の過程で溝の底に敷かれたり、両側に立て並べられていた可能性をもっている。

石製品には石臼と五輪塔がある。

274は和泉砂岩製の石臼の上臼である。芯棒受け、八分画の目を刻んでいる。

275は和泉砂岩製の五輪塔である。空輪、風輪のみが遺存している。組立式のもので、風輪の下面に軸を削り出している。梵字が陰刻されている。

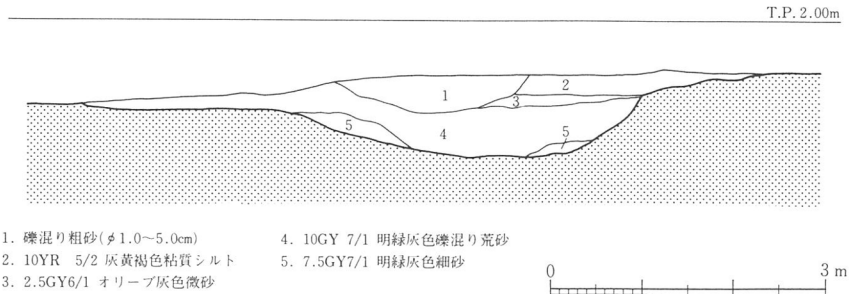
当遺構は先にも記したように長期にわたって利用されていたようである。掘削時期は限定しがたいが、出土遺物の盛行する17世紀から19世紀にかけてのものとみられる。



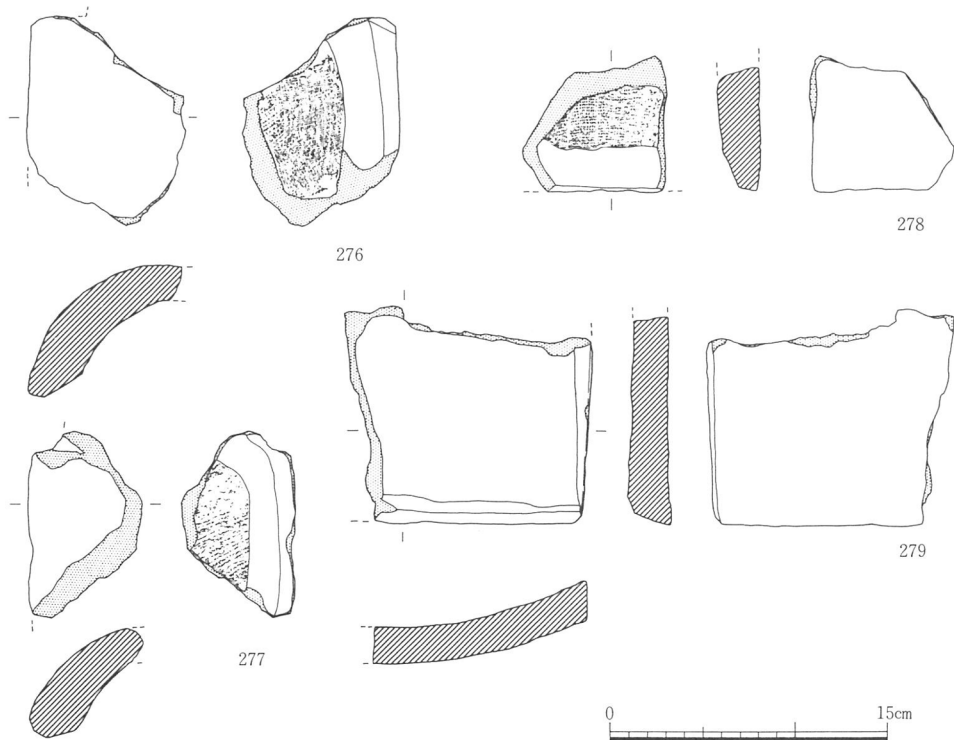
第49図 02-O S 出土遺物(5)

06-O R (第50・51図、図版30・36)

調査区の東側A24JR周辺で検出した自然流路である。調査区にはぼ直行し、南から北に向かって走行するとみられる。流路東側の上部を09-O Rで、西側の上部を後世の攪乱で削平されているため、本来の流路幅を想定することはできない。検出できた幅は5.8m、深さは1.1mである。埋土の大半は砂礫である。



第50図 06-O R断面図



第51図 06-O R出土遺物

若干量の遺物を検出した。遺物は全て瓦である。

276・277は丸瓦である。いずれも玉縁をもち、凹面には布目圧痕が認められる。側縁に面取りを施し、凸面にはヘラケズリが認められる。

278・279は平瓦である。279の凹面には布目圧痕が認められ、狭端縁に幅2.3cmの面取りを施している。

出土遺物が少なく時期を限定し難いが、いずれの遺物も16世紀以前に比定されうるものであることから、この流路は16世紀頃のものともみたい。

#### 05-O R (第52～54図、図版30・36)

調査区の東側A24OQ周辺で検出した幅12.5mの自然流路である。調査区にはほぼ直行し、南から北に向かい走行するとみられる。上部を削平されているが、検出できた深さは0.8mである。埋土の大半が砂礫もしくは砂混りシルトであるが、最下層には厚さ20cmの植物遺体層がみられた。

若干量の遺物を検出した。陶磁器、土師質土器、瓦がある。

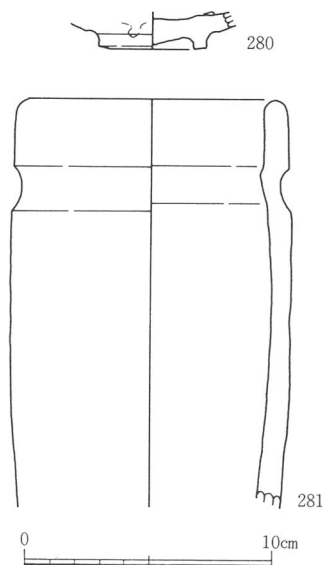
280は唐津焼系の碗である。内面の釉はオリブ色系の発色。見込み部に4箇所の胎土目が認められる。16世紀末から17世紀前半のものともみられる。

281は土師質の蛸壺形土器である。復元口径10.0cmを測る。

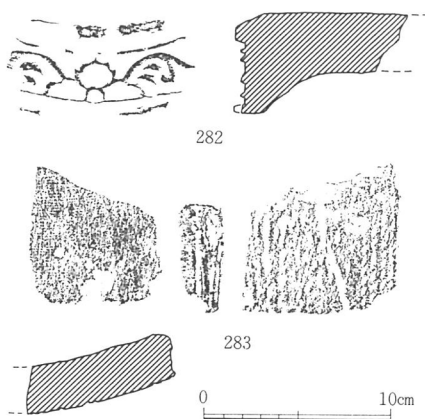
282は均整唐草文軒平瓦である。顎長は短く曲線顎である。平安時代末期に比定される。

283は平瓦である。凸面に縄目タタキ、凹面に布目痕、側面にヘラケズリが認められる。

出土遺物が少ないため、この流路が存在した時期は限定し難く、遺物の示す17世紀頃のものともみたい。

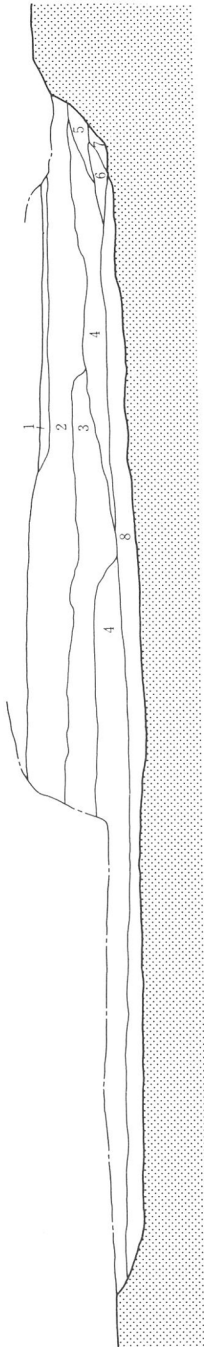


第52図 05-O R 出土遺物(1)



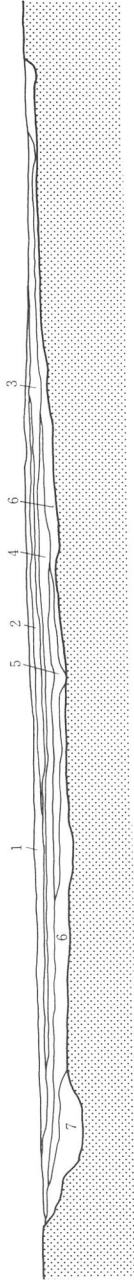
第53図 05-O R 出土遺物(2)

T.P. 3.00m



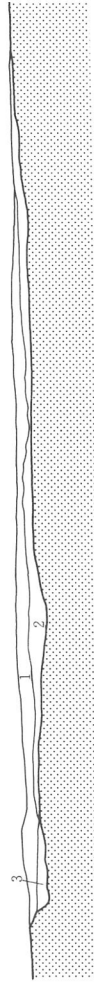
05-OR

T.P. 3.40m



03-OR

T.P. 3.00m



07-OR

05-OR

1. 10YR 8/1 灰白色細砂
2. 2.5Y 6/2 灰黄色細砂
3. 2.5Y 6/3 にぶい黄色荒砂
4. 5PB 6/1 青灰色荒砂混りシルト
5. 2.5Y 7/1 灰白色荒砂混りシルト
6. 2.5Y 7/1 灰白色礫混り荒砂
7. 7.5Y 6/1 灰色シルト
8. 10YR 4/4 褐色 植物遺体層

03-OR

1. 2.5Y 5/4 黄褐色粗砂混りシルト
2. 10YR 4/1 褐灰色粘質シルト
3. 7.5YR3/1 黒褐色微砂
4. 10YR 2/1 黒色粘土層
5. 10YR 4/1 褐灰色微砂混り粘質土
6. 7.5YR4/2 灰褐色礫混り微砂
7. 2.5Y 6/2 灰黄色礫混り粗砂

07-OR

1. 2.5Y 8/1 灰白色微砂
2. 10YR 2/1 黒色粘質土
3. 2.5Y 6/4 にぶい黄色荒砂

第54図 03・05・07-OR断面図

#### 03-O R (第54図)

調査区の西側 E04C I 周辺で検出した幅約12.8mの自然流路とみられる遺構である。西に向かって走行する。深さは約0.4mを測る。埋土は砂混りのシルトと黒褐色系の粘質土との互層からなる。堆積の状況から数度の滞水期間があったことがうかがわれる。検出面は礫混り荒砂層の上面である。

数片の遺物を検出した。いずれも細片であるため図化ができなかったが、土師質で外面にヘラミガキの痕跡が認められた。古墳時代の土師器壺の破片であろうか。当遺構の時期は出土遺物が微量であったため特定しがたいが、検出状況から今回の調査においては最も古い時期のものとみられる。

#### 07-O R (第54図)

調査区の中央付近 A24R P 周辺で検出した幅約9.6mの自然流路とみられる遺構である。02-O S と重複しているため走行方向は不明である。深さは約0.3mを測る。埋土は砂と黒褐色系の粘質土からなる。堆積の状況から滞水期間があったことがうかがわれる。検出面は礫混り荒砂層の上面である。

遺物は検出できなかった。このため当遺構の時期は特定しがたいが検出状況や埋土の状況から03-O S と同時期のものであろうか。

#### 01-O R (第41図)

調査区の最も西側、E04H E 周辺でその一部を検出した。自然流路とみられる。埋土は灰黄色系の砂質シルトである。遺物は検出できなかった。層順から判断すると中世もしくはそれ以前のものともみられる。

#### 08・09・10・11・12-O R (第42図)

いずれも調査区の南壁で確認した自然流路とみられる遺構である。埋土の大半は荒砂あるいは粗砂である。現耕土直下で検出できる。近世もしくは近代のものともみられる。

## 第4節 小 結

今回の調査は当初、古墳時代の集落の範囲確認と同時期の土器製塩に関連する遺構と遺物の検出、脇浜遺跡の新たな資料を得ること等を念頭において進められた。しかし残念ながら明確な古墳時代の遺構は検出することは出来なかった。

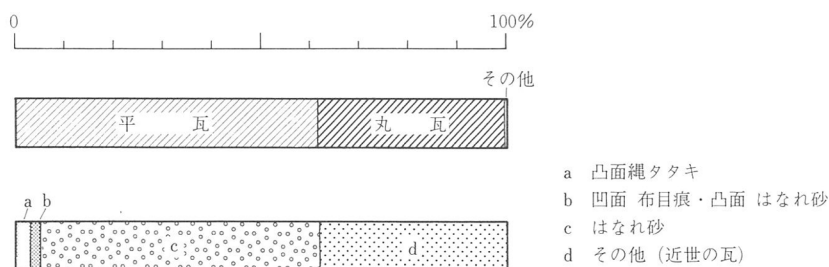
しかし僅かではあるが、新たな知見を得ることができたので、以下今回の調査の結果を簡単にまとめておく。

03-OR、07-ORはその時期を限定し難いが、今回の調査では最も古い時期のものである。特に、03-ORは出土遺物から古墳時代にまで遡る可能性を残す。

近世に属するものとしては、05-OR、06-OR等の自然流路と、02-OSの溝がある。02-OSは18、19世紀を通し長期に渡って利用されていたことが判明した。そしてこの遺構の直上に現在の水路が作られていることから、調査地周辺の地割りや水利は当時のまま踏襲されていることも判明した。

また、近世の遺構からは陶磁器とともに多量の瓦を検出した。これら瓦の中には平安時代後期にまで遡る可能性を持つものも見られ、調査当時から周辺に中世寺院の存在が推測されていた<sup>(2)</sup>。一方で今回の調査地の西方約300mの地点は長楽寺山と呼ばれ、長楽寺<sup>(3)</sup>の跡とされていることが判明した。

次に今回出土した瓦とこの寺院との関係を考えてみたい。長楽寺跡とされているのは現在西小学校のある一帯で、明治40年までは神前神社が所在していた。この社は延喜式内社に比定され、長楽寺はその神宮寺であろうと考えられている。長楽寺の建立時期は不明である。長楽寺の名は、応永32年（1425）の『近木庄神前番馬上取帳』に見られる。また応永31年（1424）の『近木庄神前番馬上取帳』、応永32年（1425）の『近木庄馬郡番夏島内



第55図 出土瓦分類図

検取帳』には「神前寺」の名が見られる。長楽寺と神前寺が同一のものであるかは即断できないが、これらのことから神前神社が所在した付近（西小学校周辺）に寺院が存在したとは推測される。

そこで、最も多くの瓦を検出した02-OSの例を取り上げて考えてみたい。出土した瓦の総数は229片である。この内平瓦が141片、丸瓦が87片、道具瓦が1片である。また平瓦の整形時の痕跡による分類では、凸面に縄タタキの跡が認められるもの4片、凸面にはなれ砂、凹面に布目圧痕が認められるもの3片、両面にはなれ砂が認められるもの80片、その他は表面がいぶされたいわゆる近世瓦が54片である。はなれ砂には砂粒の大小、密度等に違いがみられるものの、はなれ砂が付着する平瓦はおおむね中世のものともみられる。

丸瓦には形態差や調整の差が余り認められなかった。また軒丸瓦においても文様がバリエーションがあり、やや古い様相を示すものも含まれてはいるが近世に比定されうるものであり、丸瓦には特に時期の遡るものは認められなかった。

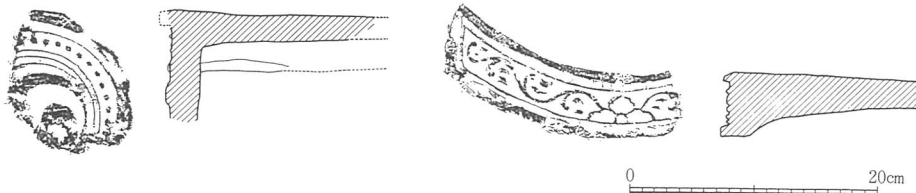
02-OS出土の瓦のほとんどが中世から近世の前半にかけてのものである。

また05-OR出土の軒平瓦282は、均整唐草文を内区文様とし貝塚市地藏堂廃寺出土の例に同じ型式を見る。平安時代末期に比定される。平瓦の283も縄タタキの跡や布目圧痕が認められ古い様相を示している。

そして包含層出土の軒丸瓦226も巴文の向きの違いはあるものの、やはり地藏堂廃寺出土の例と、二重の内圏線や小さな珠文を密に配するなど共通の意匠が認められる。平安時代末期にまで遡る可能性を持つものである。またかつて長楽寺跡より出土した瓦の中にも、地藏堂廃寺出土のものと同型式の塔文軒丸瓦が存在したとされている。

以上の共通点をもって当地域に存在したとされる寺院と地藏堂廃寺との関係を取り沙汰するのは早計ではあるが、同じ時期に存在した寺院に、同じ文様構成を持った瓦を使用した例として貴重な資料であろう。

また02-OSに利用されていた瓦は本来もっと多量に及んでいたろうことは想像に難く



第56図 地藏堂廃寺出土瓦(註2書より)

なく、付近に存在した寺院（長楽寺あるいは神前寺）の当時既に廃絶していた堂の瓦もしくは廃棄されていた瓦を利用したものではないだろうか。

註

- (1) 貝塚市音羽焼窯は貝塚市堀に所在する。寛永4年（1627）に開窯したとされている。

南川孝司・渋谷高秀・森村健一 「貝塚市の音羽焼窯の表面採集遺物」

『関西近世考古学研究』Ⅰ 関西近世考古学研究会 1991

- (2) 貝塚市教育委員会 「貝塚の寺院」Ⅰ 『貝塚の文化財』第5集 1975

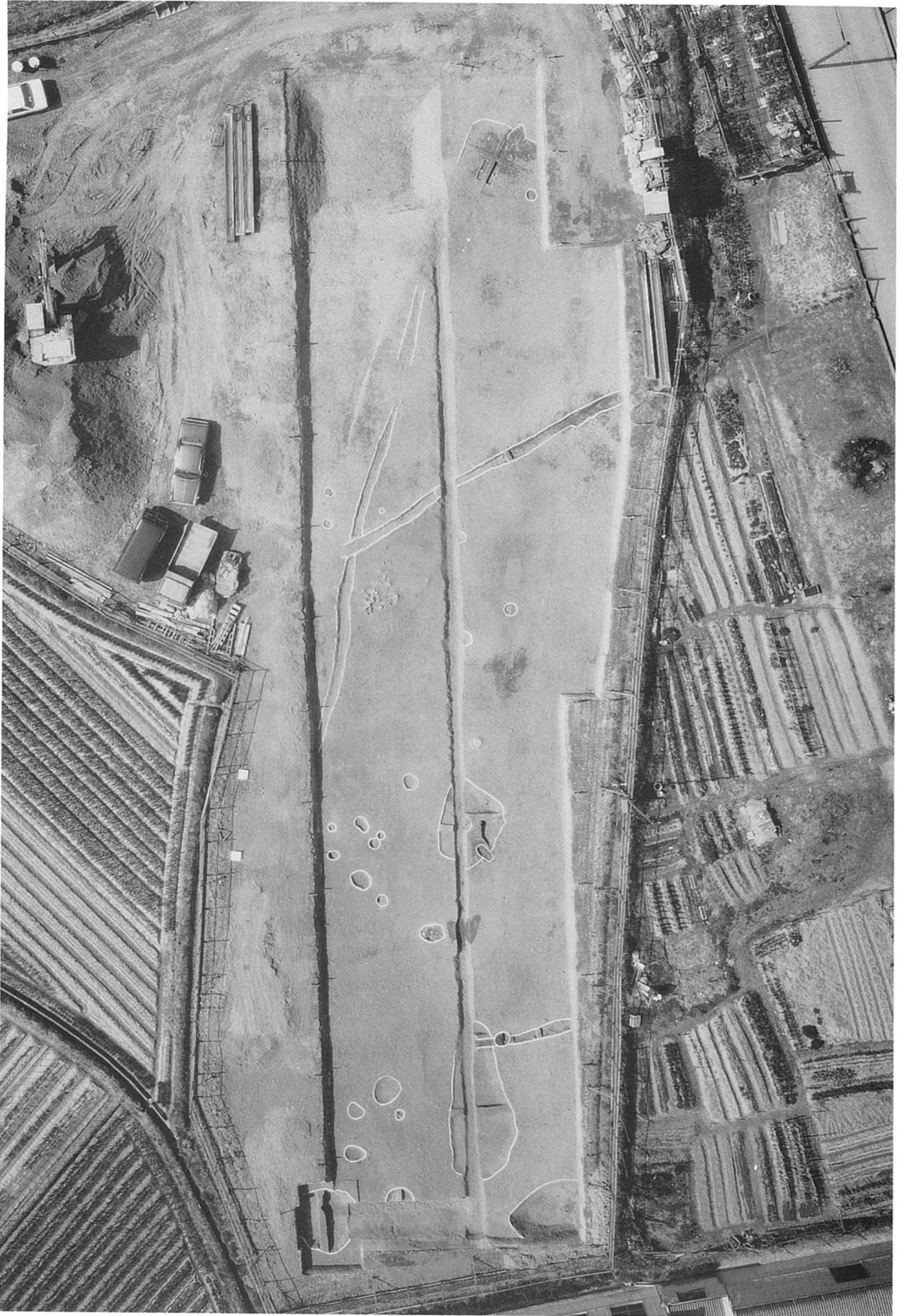
- (3) 貝塚市教育委員会 「貝塚市遺跡群発掘調査概要」Ⅴ

『貝塚市埋蔵文化財調査報告』第7集 1983

第56図は註2の文献より一部改変



# 圖 版



調査区全景



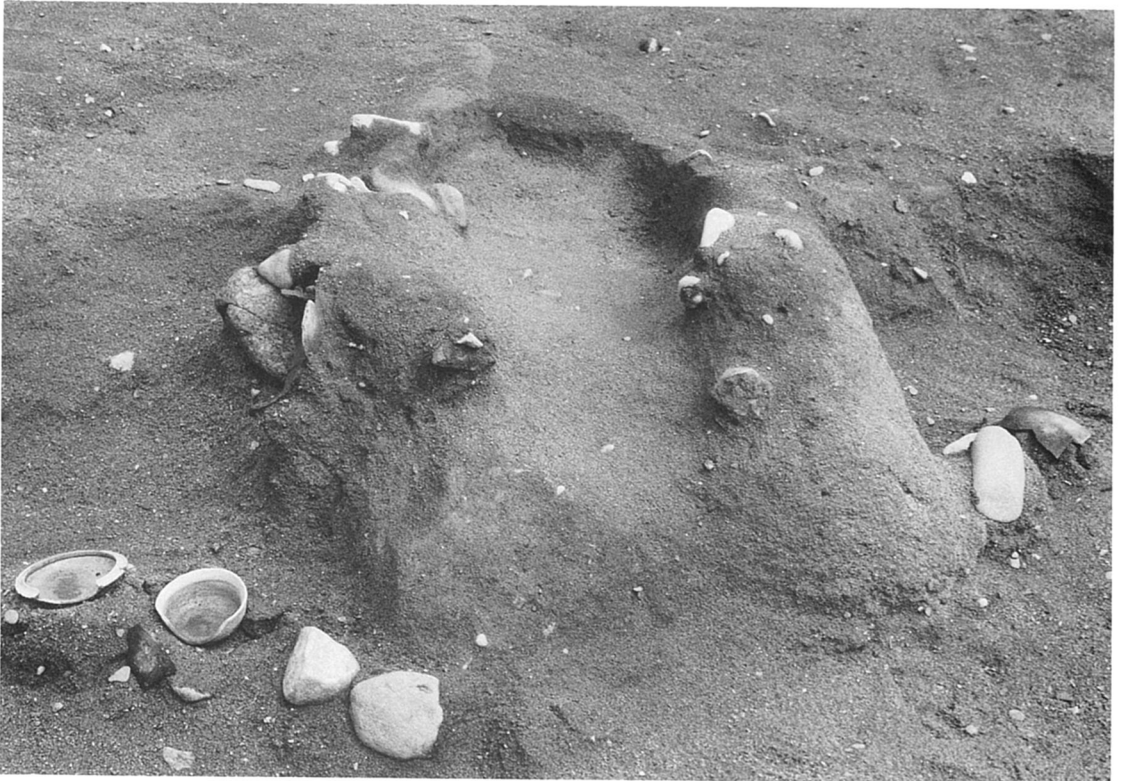
土層断面A



土層断面B

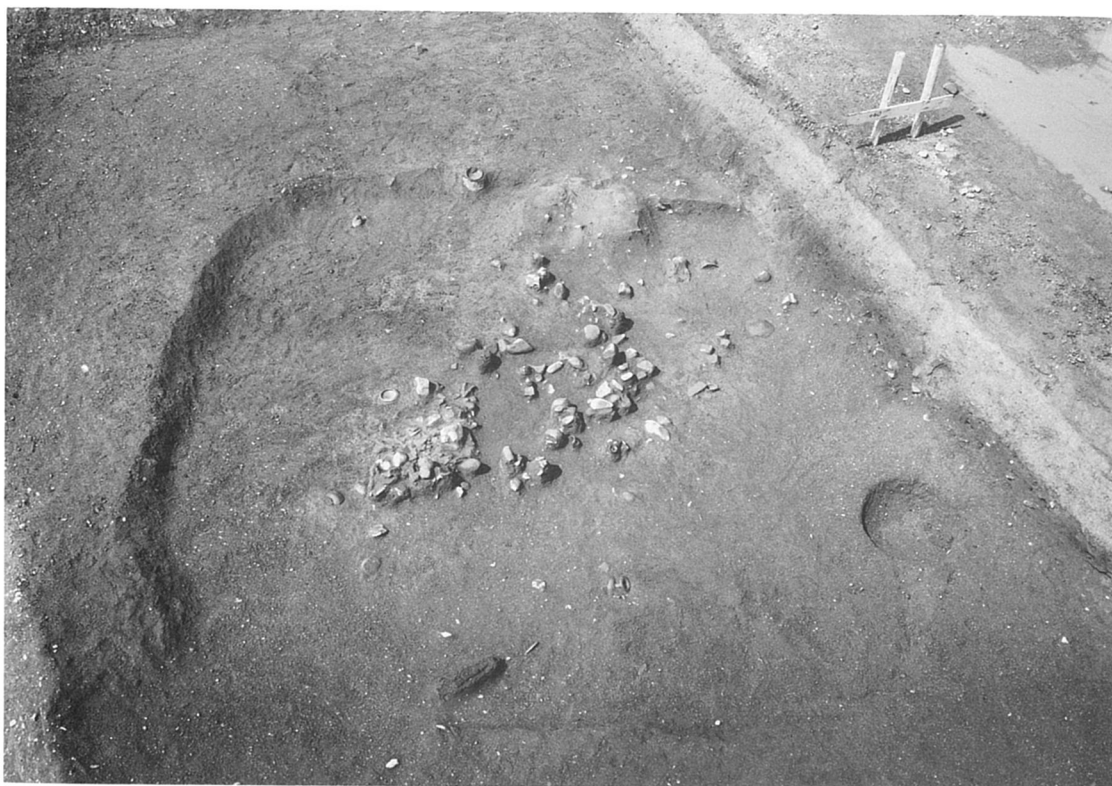


22-O D



22-O D 竈

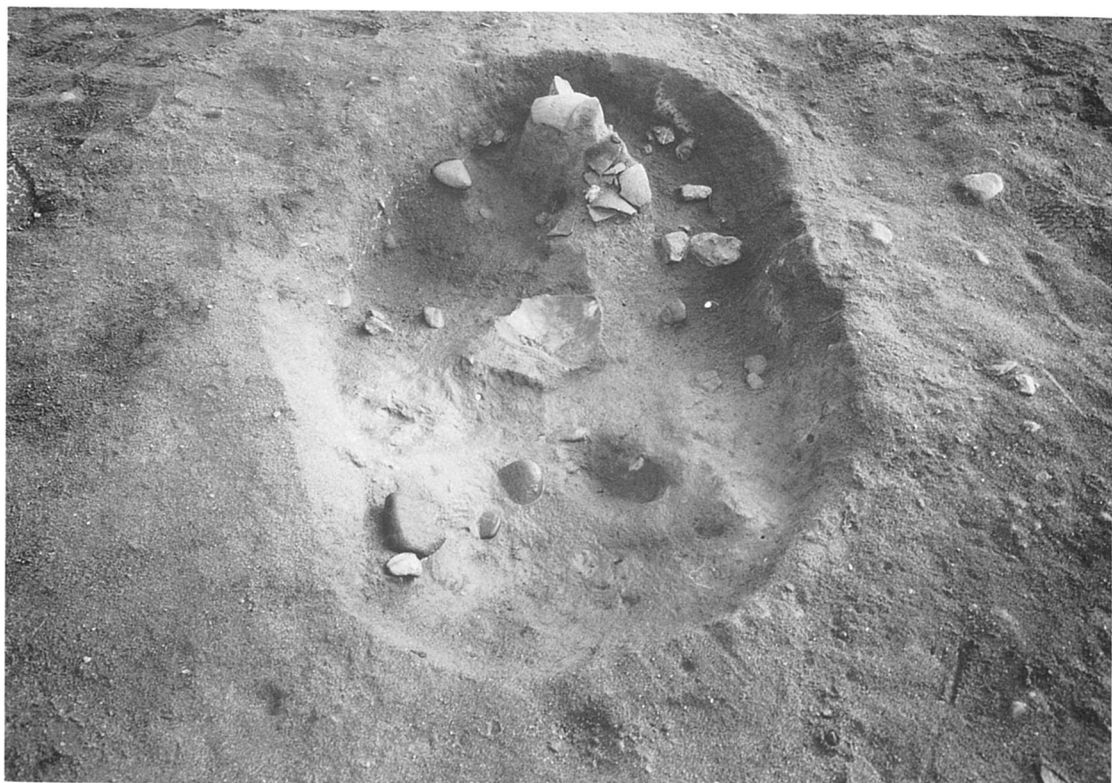




26-O D



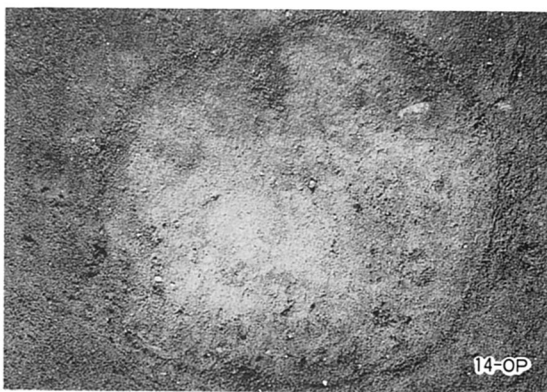
26-O D竈



21-O H



23-O X

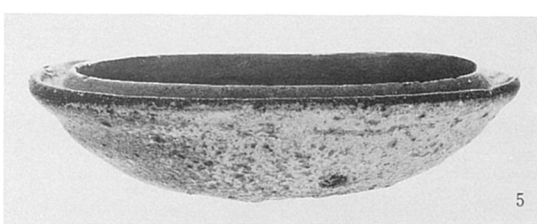
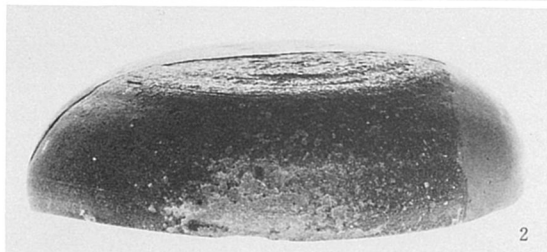
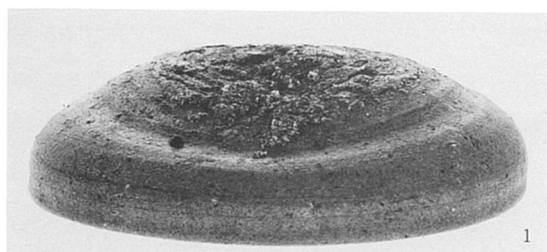


25-00, 05-00, 14-0P, 06-00

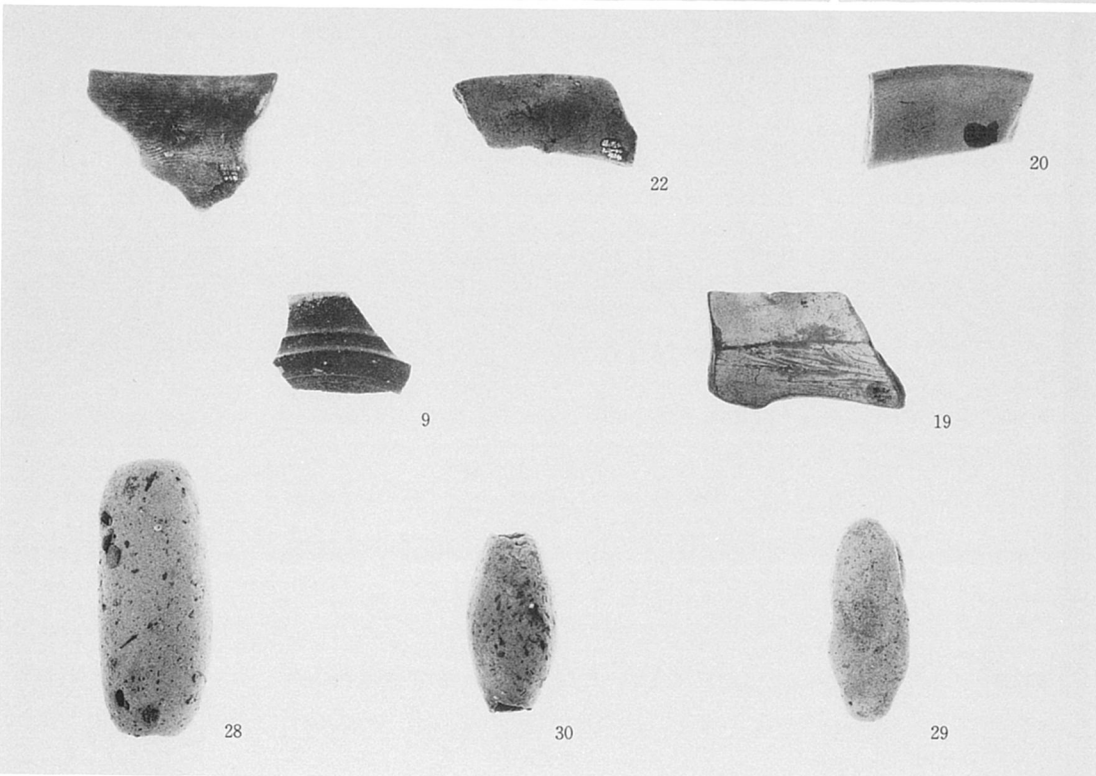
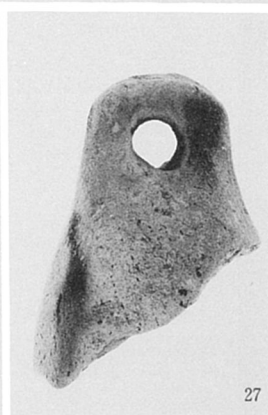


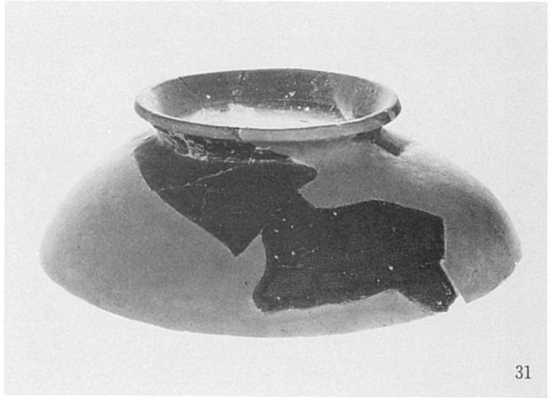
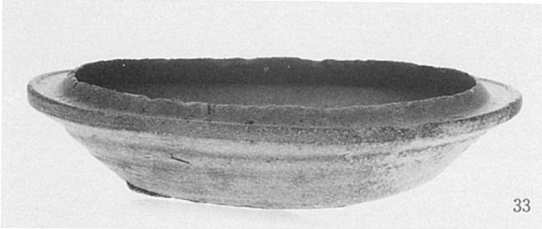
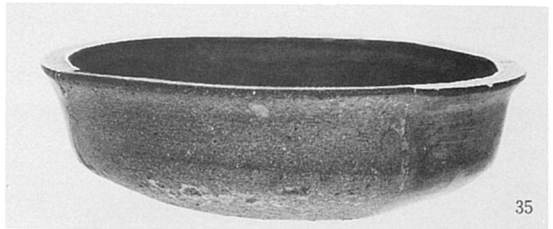
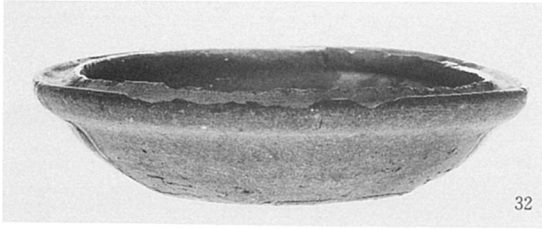
遺構検出状況

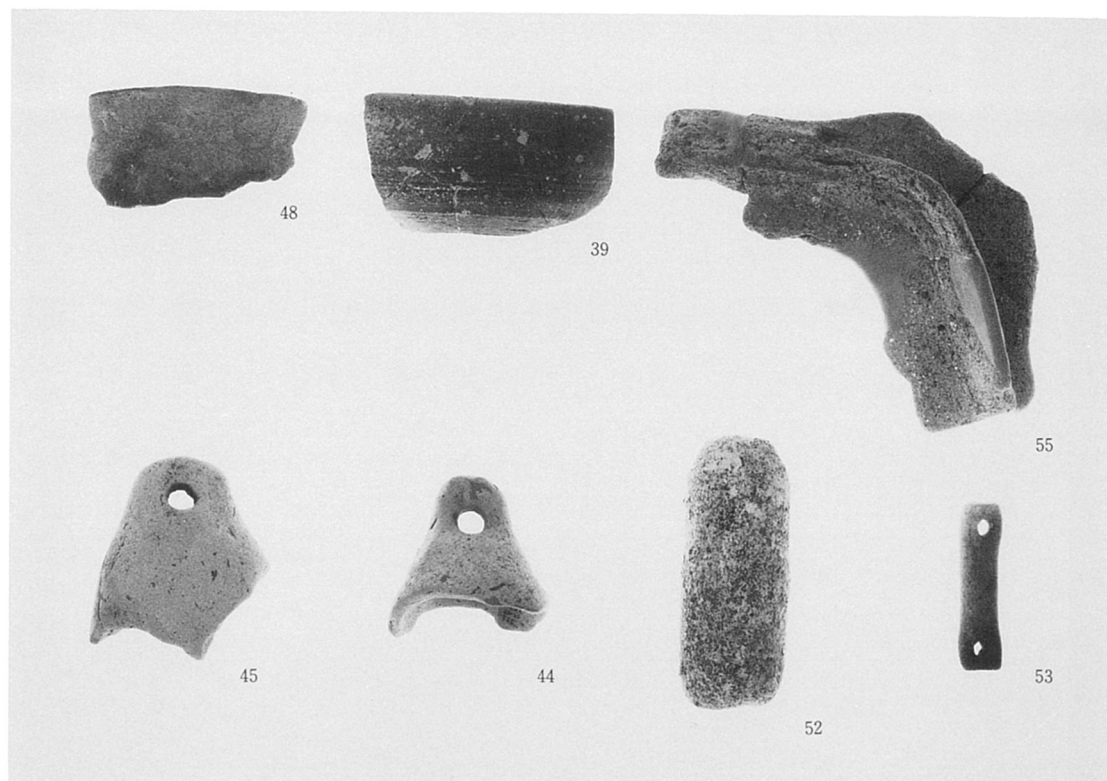




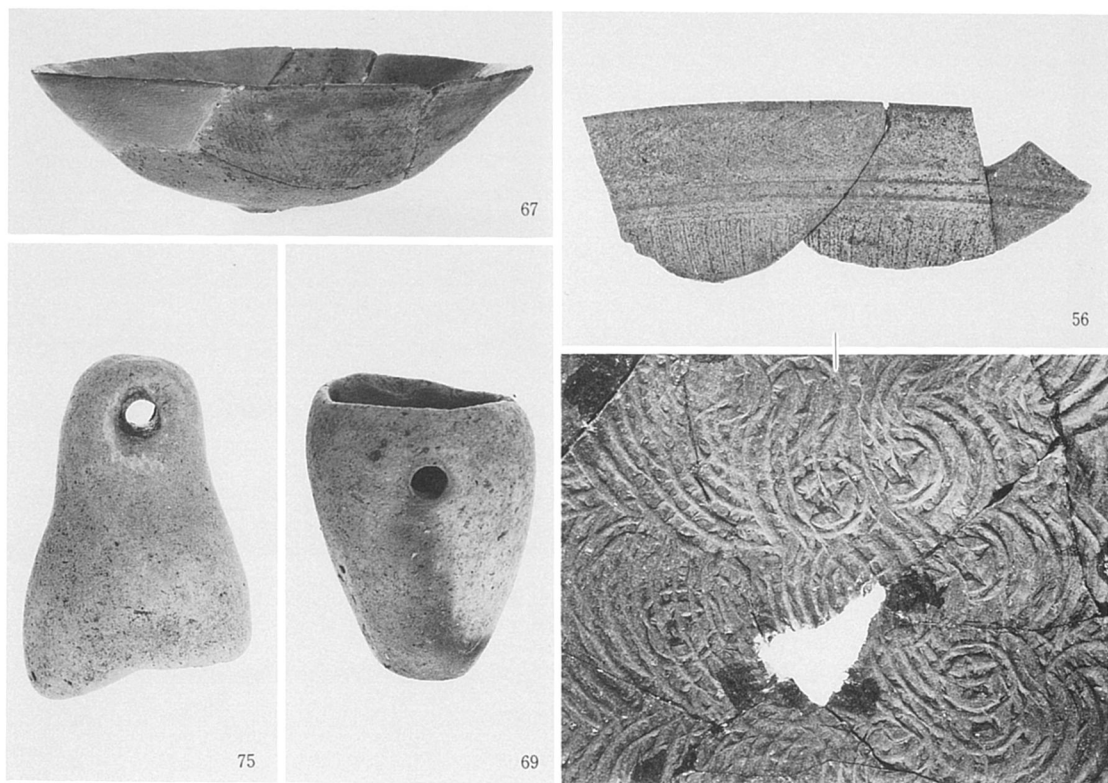








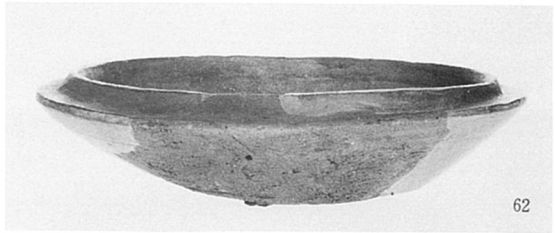
26-O D 出土遺物 2



各遺構出土遺物 1



71



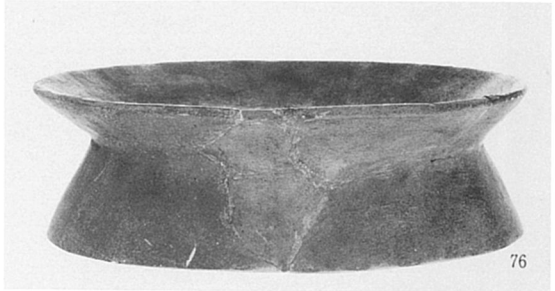
62



82



60

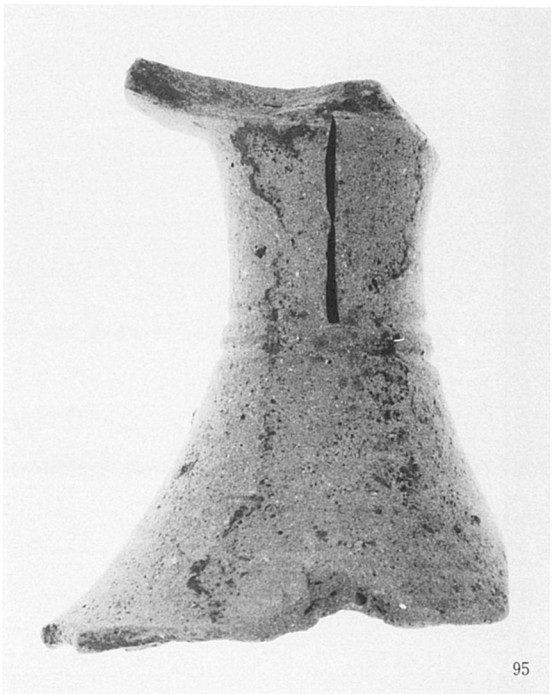


76

各遺構出土遺物 2



94



95

第4層出土遺物 1